

「2015 インドネシア大学スプリングスクール 参加報告書」

京都大学法学部3年 齊藤侑奎

今回の研修では 1.インドネシア語の学習 2.国際交流の2点を実施した。

1.に関して、インドネシア大学のインドネシア語講座を受講した。

インドネシア語講座は、毎日午前中に3時間 BIPA(外国人用インドネシア講座)を受けた。使用言語は基本インドネシア語であったが、身振り手振りを交えて楽しく授業に取り組むことができた。最終日には speaking のテストがあり、2人か3人のグループで行った。Reading でも writing でもなく speaking のテストをすることに驚きつつも、日本とインドネシアの語学教育の違いを垣間見た気がした。

英語と似ており、取り組みやすい言語であったこともあり、簡単な自己紹介や物の場所の言い方、買い物での会話等はできるようになった。しかし、学んだことを会話として自由自在に使うまでには至らなかったように思う。語学は話すことが重要であり、上達の近道である。もっと積極的に授業内外でインドネシア語を使っていくことが必要であった。

今まで自分は外国語を主としてペーパーテストでしか使わず、言語の本来の目的ともいえるコミュニケーションツールとして用いる機会が少なかった。外国語を学びそれを実際に用いて人と話したいという思いが、研修を通じてより強くなったように思う。

2.の国際交流の一環として、UI生2人と京大生2人の4人グループを5班つくり、共同発表を行った。

私たちの班は、人種・宗教差別という難解なテーマであったが、今回の共同学習には発表すること自体よりも、その難しいテーマについて UI 生と京大生が知り考えるという発表までのプロセスに意義があったように思う。人種宗教のような重い話題について、普段日本にいても学生同士で話す機会は多くない。しかし、インドネシアに行くと、大学内にモスクがあったり、公衆トイレの隣にお祈り所があったりと、日本との宗教観念の違いを目の当たりにする。けれども、日本から見ると宗教的行いとして分離して見えることも、大半のインドネシア人にとっては、もはやそれが既に日常であり、文化の1つに組み込まれているのではないのだろうか。私は現地の学生と話して、そのような印象を受けた。

人種・宗教と聞くと難解な問題を私は思い浮かべていた。もちろん差別問題など深刻で考えねばならないことも多いが、私はより身近な、日常に潜む生活と融合した宗教や文化を、見つけて少しでも理解していきたいと思う。今後もこのようなプログラムに積極的に参加し、様々な景色を見て多くの人との交流を深めていきたい。